

岐阜県中学校美術科研究部会

# 研究実践集



平成20・21年度

## 心をえがく色・形

人間が絵を描いたり、立体を作ったりする行為には、どんな意味や値打ちがあるのでしょうか。私たちは、日々の授業の中で生徒に造形活動をさせているが、何のためにと聞かれると、返答に窮してしまいます。

多くの中学生は、課題を与えれば集中して作品を制作します。題材の導入時に主題を考えさせ、参考作品や様々な造形要素を紹介し、個別指導をすることによって、それなりの質の作品を創り上げることができます。しかし、私たちは、それで満足してしまっていたらいけない。作品が出来上がればよいのではない。表現の原点、色や形が生まれてくる面白さ喜びや、心に浮かぶイメージを絵に表す快感情について、立ち止まって考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

造形的表現とは、「こんな絵を描きたい」という願いの無形の心象を、色や形からなる実在へと変化させていく営みです。誰かの指示に従って、単に色や形を並べて表現するのではなく、自己決定のもとで色や形を作り上げていく活動です。

美術の授業で、いきなり「描きなさい。」と指示しても、生徒らは心情を高揚させて表現することはできません。題材や素材との出会いを工夫したり、ためし求めの活動を仕組んだりして、発想や構想が深まるようにする必要があります。各人が自分の心に宿るイメージを膨らませない限り、造形活動は開始できません。美術という教科は、ひとつの正答を求めていく教科とは異なる側面があります。心の中が一人一人違うし、十人十色の個性的な表現を認め合える活動でなければなりません。誰が正解であるか、誰が上手いのかということが大切ではありません。その生徒なりの願いや、個性的な表現があるかどうか重要です。

今、美術教師は複数校への兼務や非常勤化がなされ、定数が減少しています。選択美術が消滅傾向の中で、美術科という教科の存続が危惧されています。また、中学校は生徒指導や進路指導等の指導や事務処理に追われる日々です。

そんな中で、美術教師が連携して、美術教育の重要性を再認識してきた場がこの中学校美術研究部会です。美術教育の危機の中で、研究テーマ「心をえがく色・形」に正対した実践研究を深めてきた成果をこの小冊子としてまとめました。ご一読ください。

平成22年3月

岐阜県中学校美術教育研究部会

会長 竹市 安彦

# 研究実践の全体構想

## ■研究の立場

### □生徒の実態から

生徒は、本来創造的な表現意欲と豊かな感性をもっている。また取り組むことが明確であれば、制作に没頭する姿が見られ、心を込め苦勞して創り上げた作品には愛着を感じている。そうした表現の喜びをいかに引き出すかが、私たちプロの美術教師に問われている。

### □岐阜県美術教育の歩みから

昭和29年の「第1回大垣大会」以来、『人間が生み出す・目と手と心の動きが創り出す』という原点を見失うことなく、普遍的な価値を求め続けてきた。また『自己表現』という領域は美術教育ならではのものであり、思春期の人間形成には不可欠のものとしてとらえてきた。

### □美術教育の今日的課題から

価値観の多様化が進む現代社会において、『自己表現』は重要視されてきており、自分を表す教科『美術』にかかる期待は大きくなってきている。美術の基礎・基本を身につけさせつつ、造形表現によって自分を表していく美術の魅力伝えていきたい。

## ■願う生徒の姿

- ・意欲的に素材や題材にかかわり、制作の喜びを味わったり、美しさを感じ取ったりしながら、主体的に自分の生き方を表現できる姿
- ・生活の中での自分の願いやテーマを大切に、自分なりの方法を試し求め、主題にせまる効果的な表現ができる姿

## ■中学校の研究テーマ

# 心をえがく 色・形

## ■研究実践の重点

## 豊かに発想し、自分らしい表現を追求する生徒の育成

## ■具体的な研究の視点

視点Ⅰ 地域の特性を生かした題材開発・指導計画の工夫

- ①素材、自然、もの、人、行事から生徒にとって必然のある題材を生み出す工夫
- ②発想力を高める指導計画の工夫

視点Ⅱ 指導・援助の工夫

- ①単位時間の展開、資料提示、学習環境づくり、交流方法などの工夫

## ■中美研としての課題

- ・地域に根ざしながら、生徒の豊かな表現を生み出す実践を交流し、会員相互の学び合いを一層深める。
- ・今年度飛騨地区大会の成功に向け、継続的な研究実践の充実を図るとともに、物的・人的・実践上の協力体制をつくり実践する。

# 平成21年度 研究の振り返り

県中美研 研究部

## □ 研究実践の重点と視点

**重点** 豊かに発想し、自分らしい表現を追求する生徒の育成

**視点Ⅰ** 地域の特性を生かした題材開発・指導計画の工夫

- ①素材・自然・もの・人・行事から生徒にとって必然のある題材を生み出す工夫
- ②発想力を高める指導計画の工夫

**視点Ⅱ** 指導・援助の工夫

- ①単位時間の展開，資料提示，学習環境づくり，交流方法の工夫等

### ◇ 第1回研究調査委員会〈実践発表〉 平成21年8月7日(金) 岐阜市教育研究所

氏名	中学校名	題材名
田中美江子 先生	穂積	2年生「ペルソナー仮面に願いを込めて」
河野 一重 先生	東	3年生「私のあゆみ，そして未来へ・・・（構想画）」
横関 慶 先生	旭ヶ丘	1年生「文字のデザイン」
藤本 紀和 先生	西陵	2年生「あかり」
横山 大輔 先生	松倉	1年生「家紋を彩るー配色と構成ー」
森下 隆弘 先生	古川	1年生「私の故郷をPRしようー地域PRポスターー」

### ◇ 第2回研究調査委員会〈実践発表〉 平成21年1月10日(土) 岐阜市立長良中学校

氏名	中学校名	題材名
田中美江子 先生	穂積	1年生「自分を見つめてー自画像ー」
河野 一重 先生	東	3年生「枡でますます楽しくー枡のデザインー」
横関 慶 先生	旭ヶ丘	1年生「自画像」
藤本 紀和 先生	西陵	2年生「あかり」
横山 大輔 先生	松倉	2年生「1年間の目標ーデザインー」
森下 隆弘 先生	古川	3年生「輝き マイライト」

今年度は「今一度，飛騨の伝統である“版”を素材とした題材を見直し，地域に密着した美術教育を展開しよう」という提言のもと「飛騨大会」が盛大に開催された。県中美研としても，それぞれの地域における「素材，自然，もの，人，行事といった特性を生かした題材の開発」と，昨年度課題となった「やや作品に弱さを感じる面があり，その生徒なりの願いや，個性的な表現を追求ができていないか。」という視点を大切にしながら，6人の研究調査員の先生の実践をもとに「豊かに発想し，自分らしい表現の追求」について，研究を重ねてきた。

<田中先生>

2年生「仮面」の実践では，既製の仮面芯材に紙粘土と彩色でいろいろな装飾をされた作品がみられた。一方で，指導すべき「テクニック」の精選という点が課題となったが，1年生「自画像」の実践では，生徒の「うまく描きたい（形を取れる）」という意欲に応えるためにスケッチの「基礎・基本」を確実におさえる指導（「1時間に3枚自画像クロッキー」「パーツごとのスケッチ」）の工夫がされ，一人ひとりの発想力は基礎的技能が身についた上で高まることを示された。

<河野先生>

「構想画」と「枡のデザイン」という3年生の出口となる題材の実践を発表された。「構想画」は生徒たち歩みや未来への願いを表現する題材であり，造形要素が多く表現の抵抗が大きい題材であるが，自分の進路をかけた題材そのものに生徒の意欲を引き出すものとなっていた。また「枡のデザイン」は，地域の産業と向き合って今年度開発された題材で，実際に使える作品であることや，

今度、展覧会を開くことで地域への発信など、デザインの出口まで大切にされた実践であった。

<横関先生>

「絵文字」と「自画像」という1年生題材の実践を発表された。「絵文字」では「パーツを置き換える」「形を変える」「色を変える」という造形要素を整理しながら指導されていた。また、「自画像」においては、生徒たちの「うまく形にできない」「描き方がわからない」という意識をもとに、「みる」とはどういうことなのかを、例えば「目」に視点を与えて指導をされていた。豊かな発想や自分らしい表現に課題をもちながらも、生徒の意識にそった丁寧なテクニック指導であった。

<藤本先生>

2年生題材「あかり」について、1回目は制作過程を、2回目は制作後の作品をもとに実践を発表された。素材に限定がなく、表現は多様である。藤本先生は、いろいろな実践発表での指摘から、素材に迷いがあるようであるが、生徒にとっての意欲を考えた時、多様な素材は必須である。この実践からイメージがもてない生徒に「繰り返し」から生まれる形の美しさに気づかせた指導が効果的であった事実をもとに、「繰り返し」を本題材の造形要素を精選することで、ねらいが明確にされそうである。

<横山先生>

デザイン題材で1年生と2年生の実践を発表された。1クラス分の作品（「十分満足できる表現」から「努力を要する表現」まで）をもとに、技能面での評価規準と、それぞれの生徒への指導の在り方が明確にされていた。どの生徒も丁寧にベタ塗りができていたことから明確な指導があったことがわかる。異学年のデザイン題材を発表されたことで、新指導要領「各学年の目標及び内容の系統表」を参考にしながら、発達の段階に応じた題材の指導計画をつくることの大切さを学んだ。

<森下先生>

1年生「地域PRポスター」と3年生「マイライト」というデザインや工芸などの実践を発表された。昨年度、「版画とデザインとを結びつけた」実践において、複雑な学習内容を精選し、意図的・計画的な指導計画していく必要に気づき、「マイライト」では、マジックで色を塗ったペットボトル発する色をアルミの針金と和紙で作ったシェードに映し出す照明であることから、シェードの形を「球状」「筒状」「花びら状」にしぼり、その中で美しい色と形を追求する実践であった。

飛騨大会において、飛騨の「版」の伝統は、決して自然にできたものではなく、飛騨と地域に目を向け、「木」という素材から生徒と教師の間で生まれてきた表現であったことが確認された。また、「版画集」からは、幼稚園、小学校、中学校（1年生・2年生・3年生）とそれぞれの発達の段階らしい版画表現があることも確認された。

今年度の研究を通して、「生徒にとって必然のある題材」について、「必然」とは、題材にはじめからあるものではなく、「主題」からうまれたり、「意欲」の面からうまれたり、「テクニック」の面からうまれたりするものであることがわかってきた。また、これまでの研究において明らかにされた、各学年や各地域の生徒の実態、発達段階や各学年のねらいを踏まえた3年間の系統的な指導計画をさらに見直していくことで、「その生徒なりの願いや、個性的な表現を逞しく追求できる姿」がみえてきたようである。

各学年のねらいを踏まえた3年間の系統的な指導計画は、新学習指導要領で示された「各学年の目標及び内容」をもとに見直し、今年度の研究と岐阜県の実態を加味しながら、さらに「生徒にとって必然のある題材」を究明し、生徒一人一人が、美術の授業を通して感動を覚えるような実践を各学校で積み上げて、3年後の「美濃大会」を全会員で迎えたい。